国民国家という境界を越えた文学(者)と歴史(家)の交流

「東アジアと同時代日本文学フォーラム」第一回大会への参加記

黄 東 淵
dhwang@soka.edu

近代中国史の専攻者である筆者は、これまでに韓国の趙廷來、中国の魯迅と巴金、日本の夏目漱石などの文学作品を読んで、それらを研究あるいは講義に活用したことがある。ところが文学の門外漢である筆者に、文学(者)と歴史(家)の交流がいかに重要であり、かつ必要なことであるかを新たに気付かせてくれたのが、去る2013年10月18-19日の高麗大学日本研究センター主催による「東アジアと同時代日本文学フォーラム」第一回大会であった。「東アジアにおける日本語雑誌と植民地時代の文学」という共通テーマで開かれたこのフォーラムには、日中韓台の4カ国の日本文学研究者と歴史学者の筆者が参加した。日中韓台という4カ国で日本語文学を研究する学者たちが、問題意識の共有を通じてこのフォーラムを組織したものだという。フォーラムの参加者からは、今後も毎年4ヶ国を巡回しながら共同研究や発表を続行する計画があるという興味深い話も聞くことができた。歴史学者として、このような重要かつ意義あるフォーラムの最初の大会に参加要請を受けたことは個人的にも大変光栄なことである。特にフォーラムの主体である日本語文学研究者との出会いと交流は、新しい知的刺激の場として胸に迫るものがあった。

全4部で構成され、二日間に亙り開催されたこのフォーラムでは、参加者の真剣、かつ白熱した発表と討論、さらにフォーラムを企画、組織された日本研究センター側の緻密な準備と進行、参加者への細やかな配慮などが際立っていた。学術的にも成功したと評価されるべきこのフォーラムに参加して、筆者が感じたことは多くあるが、ここでは紙面上、学術的面から歴史学者として考えた二つの点を簡単に記録しておきたい。

まず一つは、国民国家の境界と枠組を超えた文学の研究がすでに幅広く学者たちの間で共有されているということである。実際に最近の欧米学界では「中国文学」(Chinese literature)という支配的な用語を排斥し、「中国」という閉鎖的かつ抑圧的な国民国家の枠から抜け出し、世界の各地域で多様な「中国語」の使用者たちによって書かれた文学作品を、「中国語(使用者の)文学」(Sinophone literature)という用語によって研究する傾向が現れている。今回のフォーラムにおいて東部アジア4カ国の学者たちも、こうした傾向に同参することを見せてくれた。なぜなら、英語ではJapanophone literatureと翻訳できる「日本語文学」という用語を使い、日本の植民地であった朝鮮、台湾と満州において日本語で書かれた多様な文学作品を分析した発表が多かったからだ。これらは「中国語文学」を主張する学者たちの場合と同様に、「日本文学」という国単位からの支配的視点と枠組みから抜け出て、多様な地域性と文脈を重視しつつ文学作品を理解しようとする学者たちの試みであると感じられた。重要なのは、それらが言葉の変化を意

味するだけではないということである。つまりこれが第二の点であるが、ほとんどすべての発表が(意図した、しなかったということに拘らず)日本語文学自体がもつ超国家的(transnational)な性格を前提としたものであった。特に多くの発表が東部アジア4カ国において、いわゆる「民族文学」が「日本語文学」と直接的、あるいは間接的に相関関係を持つことを示唆しており、これは超国家的連携(transnational linkages)が各国民国家の文学の中に存在することを表しているといえる。「民族文学」研究が持つ限界を克服する一つの鍵が、まさにこのような指摘の中にあるのではないだろうか、また、このような超国家的連携を示す文学の研究を「超国家的民族文学」研究と呼ぶことはできないだろうかと考えてみた。筆者がフォーラムで発表した「超国家的国民国家の歴史構成」という主張も、日本語雑誌と東部アジア各国の急進主義台頭の過程にある超国家的連携を根拠としたものであった。もし「超国家的民族文学」研究が「超国家的国民国家歴史」研究と連携されたなら、既成の「民族」というパラダイムから抜け出し、超国家主義を通して文学と歴史を研究することができるのではないだろうか。また、こういった変化が可能であるならば、学術発展はもちろんのこと、このようなパラダイム転換が招来する実質的、かつ実践的な結果としての、地域や国家間の相互疏通と和解も期待できるのではないかと想像するところである。

歴史と文学が互いに越境するということは明らかである。したがって歴史学者と文学者の越境も、また当然必要だといえる。だが、こうした学際的な交流だけでなく、国民国家自体を越えた超国家的傾向による研究も持続されなければならない。もちろんこれらを成し得る知的環境はすでに数多く造られている。学際間の境界を越えて文学と歴史を研究する学者たち自らも、これからはそのような環境の中で国民国家という境界を指摘するのみに留まらず、物理的にも直接乗り越えながら研究することにより、その結果を共有することができるのではないだろうか。知的な境界だけでなく、物理的境界をも往き来する日本語文学作品と、その人物をめぐる発表が多く占めた今回のフォーラムは、このような点で大きな意義があり、歴史学者として多くの示唆を得ることができた。今後もさらに多くの学術的意義を創出し、知的刺激を提供しながら発展し続けるフォーラムの未来を期待したい。

黄東淵 Dongyoun HWANG

(USA) アメリカ創価大学(Soka University of America)アジア学科、教授。中国抗日戦争時期の対日合作問題と東部アジア急進主義台頭と発展。『새로운 과거 만들기：圈域시각과 동부아시아 역사 재구성』(서울：혜안, 2013)、『경계초월자와 도시연구－지구화 시대의 매체, 이주』(共著, 서울：라움, 2011)、「옌안(延安), 중국혁명의 근거지 혹은 동부아시아 급진주의 네트워크의 교점(交点)：중국혁명사와 동부아시아 급진주의 역사의 초국가적 연계와 단절」(『歴史学報』221輯 2014)、"Korean Anarchism before 1945：A Regional and Transnational Approach" in Steven Hirsch and Lucien van der Walt eds., *Anarchism and Syndicalism in the Colonial and Postcolonial World, 1870-1940：The Praxis of National Liberation, Internationalism, and Social Revolution*,(Leiden：Brill, 2010)。